

平安前期和歌の「若紫」が喚起する心象

——「若草」との連関と径庭とを中心に——

森田直美

要旨

平安期の和歌には、『伊勢物語』初段が擁する「春日野の若紫のすり衣」あたりを契機に、歌語「若紫」が散見するようになる。この歌語は従来、「淡い紫色」、もしくは「紫草の若いもの」を指すと説かれてきた。しかし、平安期の和歌用例を概観すると、特に後者の「紫草の若いもの」という概説は、抽象的にすぎるといって、やや問題がある。本稿は、特に平安前期、具体的には『源氏物語』以前の「若紫」用例を取り上げ、「若紫」が喚起する心象について、より詳細に検討することを主眼とする。

考察にあたり、まず「若紫」なる歌語の生成過程を確認する。『万葉集』には、「若紫」の用例は確認できないが、同集に見える「若草」、および「紫」の表現には、平安期以降の「若紫」例に通じる要素がある。よっておそらく、この二語が、

キーワード・平安前期和歌 若紫 若草 生成過程 季節特定不可能性
語彙的、表現的に融合した点に歌語「若紫」が現出したと考
えられる。

しかし、「若紫」の生成基盤にあったと思しき「若草」が、春を強くイメージさせる歌語であるのに対し、「若紫」の用例には、春との強固な結びつきは看取できない。こうした点を踏まえ、また、「若」を冠さない「紫」との共通性や語感差なども勘案すると、平安前期和歌の、特に植物を意味する場合の「若紫」が喚起する具体的な姿とは、瑞々しく柔らかな、掘りたての紫根ではないかと考える。

一 はじめに

筆者は以前、『伊勢物語』初段の中核である「若紫のすり衣」詠を考察対象とし、紫の摺り染色のフィールドワークを踏まえ、「若紫」とは、掘りたての、乾燥させていない生紫根を

イメージさせるものではないかと論じた^①。また別に、『うつほ物語』の作中贈答歌を材として、染料としての紫草の性質や、その染色工程のありようが、和歌表現に少なからず影響を及ぼしているだろうことを論じた^②。その際にも同様に、「若紫」は晩秋に収穫したての紫根を指す可能性が高いのではないかという見解を示している。

以上ふたつの拙稿は、平安前期和歌、さらに限定すると、『源氏物語』以前の和歌における「若紫」が具体的に指示していたもの、あるいは「若紫」という歌語が喚起する心象について、結果的に同じ見解にたどりついた。しかしながら、「若紫」に関する検討が、これらの拙稿で十全に行われたと考えているわけではなく、筆者の考えにも、未だ流動的な面がある。

本稿では、「若紫」が喚起する具体的な心象について、より細密に考えてゆくにあたり、まずそもそも「若紫」なる歌語が、どのように和歌史に立ち上がってきたのか、その過程を改めて辿りかえしてみたい。すなわち、『万葉集』から用例の見える「若草」のイメージに、「紫」がもっている恋愛表現との結びつきの強さが重なりあい、「若紫」という歌語が発想されたのではないかという推測を、順を追って述べる。さらに、「若紫」の発想源に存するかと思われる「若草」との差異性を検討し、「若草」を対岸において見えてくる「若

紫」の特性を示す。そして最後に、「若紫」が喚起する心象・原像を検討する段へと立ち戻っていこうと思う。

なお、本稿の考察対象は、主に『源氏物語』以前の和歌における「若紫」用例である。「若紫」のイメージは、同物語を経て大きく変化すると考えるため、ひとまずそれ以前の和歌から、この語が本来的に示していた具体像を検討してゆきたい。

二 「若紫」の語義―植物から色名への敷衍という想定―

「若草」と「若紫」との連関について触れる前に、まず「若紫」という歌語の原義が、植物としての紫草にあったであろうことについて、簡単に触れたい。この後に論じる、平安前期和歌に、『万葉集』には用例のなかった「若紫」なる歌語が現出する過程を検討するために、押さえておくべき基本と考えるためである。

さて、現在一般的に、歌語としての「若紫」には大別して二通りの意味があると理解されている。すなわち、『歌ことば歌枕大辞典』^③によれば、

① 植物の紫草の若いもの

② 紫草の根で染めた淡い紫色

の二義が挙げられている。

たしかに、現存和歌に確認される「若紫」の初例は、『伊勢物語』初段が擁する

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限りしられず

であり、この「若紫」は、春日野で採取された紫根、すなわち、植物の紫草を指している。そして、『伊勢物語』初段の詠に影響を受けたと思しき、京極御息所歌合での次の二首、

今年よりにほひそむめり春日野の若紫に手々なふれそも

(四〇)

ちはやぶる神も知るらむ春日野の若紫にたれか手ふれん

(四二)

なども同様に、植物の「若紫」を詠んだ例である。

また、他に「若紫」用例の比較的早いものとして、

藤浪のかかれるさしの松は老ひて若紫にいかで咲くらん

(順・二二五)

染むれども色はこからずみゆるかな若紫にあればなるべし^④

(藤六・二三)

などが挙げられるが、これらは、紫色の色相を「若紫」と表現する例である。

以上のような用例から、ひとまず平安前期和歌において「若紫」が、植物、もしくは紫の色相を指していることは認められるだろう。

さて、概説すれば「若紫」は植物の紫草、あるいは色相を表す^⑤となるが、その原義はやはり「植物の紫草」で、色相はそこから敷衍した語義ではないだろうか。この意味的な広がりに対する想定根拠は二点ある。まず一つ目には、「若」を冠さない「紫」の語義的広がりと同様の過程を、「若紫」もたどっているのではないかと考えるためである。

早く伊原昭氏が論じられ、拙稿にも触れたことだが、特に『万葉集』において「紫」は、主に植物として、染料としての性格が強く、いまだ概念的な色彩語として自在に機能する段には至っていない^⑥。平安期に入り、徐々に「紫」は、和歌表現の中でも、植物名、または染料名である紫草の意識を離れ、さまざまなものを形容する概念的な色名として扱われる例が散見するようになる。「若紫」の場合も、「紫」と同様に、植物の意が先にあり、そこから、紫根から生み出される色相をも指しあらわすようになったという過程で捉えるのが、穏当ではないかと思われる。

また、もう一点の理由は、そもそも色彩が淡いことを「若」

で表すことが、非常に特異な表現だと考えられるためである。「若」を冠して色彩の薄さを指す、そうした類例が他に
あるだろうか。「若赤」「若青」、あるいは「若紅」「若藍」な
どという表現が確認できないことと対照すれば、「若紫」の
「若」が紫の色相の薄さを指すものとして扱われることの特
殊性を見てとれる。色相の「薄さ」を表現することが、「若」
の用いられ方として一般的でない以上、「若紫」の「若」は
元々植物の状態を指し、そこから、「紫の薄さ」をも意味す
るようになったという順序を想定するのが自然ではないだろ
うか。

そして、「若紫」という語が始発点において植物を指して
いたと措定すると、「紫（紫草）」という植物名に「若」を冠
そうとする発想の淵源として浮かぶのは、『万葉集』にも用
例の確認できる「若草」「若菜」といった、植物に関連する
語彙ではないだろうか。中でもとりわけ、表現的な連関とい
う意味で注目したいのは「若草」である。

三 「若紫」の形成過程―「若草」と「紫」との融合―

ここからは、「若紫」と「若草」との歌語的共通性に目を
留めつつ、「若草」と「紫」の両語が相まって、「若紫」とい
う歌語が発生したのではないか、という仮想を傍らに置きな

がら、論を進めてゆく。

時系列から考えると順番が逆になるが、この仮想は、例え
ば『源氏物語』の若紫巻を思い起こすことで、まずある程度
の説得性をもつのではないだろうか。光源氏による紫の君の
発見と交流、そして自邸への引き取りを中心に描き、「若紫」
の巻名を有する同巻には、作中和歌に「若草」のモチーフが
多々盛り込まれている。というよりも、若紫巻の内容を見て
ゆくと、ヒロインである紫の君のイメージは、むしろ「若草」
「初草」の語によつて形成されていると言ってもいい。

鈴木宏子氏は、若紫巻への影響が大きいと考えられる『伊
勢物語』初段、四十一段、四十九段の三章段に共通する性質
のひとつとして、「春日野、若草、初草」などといった「若草」
のモチーフをもつことを挙げている。

たとえば、光源氏が療養先の北山で紫の君を初めて目にす
る場面である。年頃はすでに十歳前後に至りながら、男の子
のように走り回り、顔に赤くこすった跡をのこして、「雀が
逃げた」と言つては愚図る、あまりにも幼い紫の君を、養育
する祖母の尼君は不安な心もちで見つめている。その際に、
尼君が傍らにいた女房とともに詠んだのが、次の二首である。

尼 君 おひ立たむありかも知らず若草をおくらす露ぞ消え
む空なき

女房 初草のおひ行く末も知らぬ間にいかでか露の消えむ
とすらむ

両歌にある「若草」「初草」は言うまでもなく、紫の君をたとえている。

登場して間もなくのうちに「若草」「初草」に比せられた紫の君は、その後も同巻の作中和歌で、

光源氏 初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖も露ぞかわ
かぬ

などと、終始「初草」「若葉」などにたとえられる。そして、

光源氏 手に摘みていつしかも見む紫の根にかよひける野辺
の若草

と、藤壺との血縁を踏まえて詠みだされた一首により、同巻の巻名「若紫」が導き出されたとする古注釈以来の定説は、もはや説明を要しないだろう。^⑦

以上のように、「若草」のモチーフに、ゆかり色である「紫」という要素が重なりあい、「若紫」という巻名につながってゆく流れは、「若草」と「紫」とが融合して「若紫」なる歌

語が現れ出でる、和歌表現の流れの縮図とも捉えられる。すなわち、若紫巻の巻名の由来から還元して考えると、『万葉集』に既に用例が見える「若草」、および「紫」の表現が融合して、平安朝和歌に「若紫」という歌語が立ち現われたのではないかという仮想の蓋然性が高まるのである。

では以下に、『万葉集』、および『古今集』の「若草」と「紫」の例を挙げつつ、引き続き「若紫」の現出過程を、表現面から追ってゆく。前述したとおり、現存する和歌において、「若紫」という歌語の初見は以下の『伊勢物語』初段所収歌である。著名な章段ではあるが、後の考察にも関わるため、煩雑ながら全文を掲出する。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにし
われならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやび
をなむしける。

ここでの「若紫」は、従来多く指摘されてきたように、男
が春日野で見出した、若く美しい姉妹を暗喩している。また、
紫のすり染めをほどこした衣は、男の心に恋が芽生えたこと
を表す。つまり、

① 若い女性、恋人、もしくは想いを寄せる人の比喩

② 染色と恋の表現との深いつながり

というふたつの要素を、ここでの歌語「若紫」は有する。そ
して、上代から平安前期の和歌において、「若草」は①の要
素を、「紫」は②の要素を示す例が、少なからず確認できる。
以下に①②それぞれの用例を、『万葉集』『古今集』から数首
ずつ挙げる。

① 若い女性、恋人、夫・妻の比喩としての「若草」

春日すら田に立ち疲る君は哀しも若草の妻なき君は
田に立ち疲る (万葉・巻七・一二八五よみ人しらず)
若草の新手枕を まきそめて夜をや隔てむ憎くあら

なくに (万葉・巻十一・二五四二よみ人しらず)

春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこ
もれり (古今・春上・一七よみ人しらず)

② 恋の表現と深くつながる「紫」の染色

託馬野に 生ふる紫草 衣に染め いまだ着ずし
て 色に出でにけり (万葉・巻三・三九五笠女郎)

韓人の衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも

(万葉・巻四・五九六麻田陽春)

恋しくはしたにを思へ紫のねずりの衣色にいづなゆめ

(古今・恋三・六五二よみ人しらず)

このように、「若草」は、「つま」を引き出す枕詞として機
能するほどに、若い女性、時に男性の場合もあるが、^⑤恋人や
夫婦関係にある人の喩として用いられてきた。また「紫」を
衣に染めることは、しばしば、心に恋心が染み入ることに重
ねられている。つまり、両語の交差する点に、『伊勢物語』
初段の「若紫」という語と語義はある。「若草」と「紫」と
が交差する点に、歌語「若紫」が現出したと考えるゆえんで
ある。

四 「若草」と「若紫」の差異性

―季節特定の可・不可という視点から―

さて、ここまで「若紫」と「若草」、及び「紫」との共通性について述べてきた。しかし、特に「若草」と「若紫」とを対照させると、イメージ的に結びつきが強いと思われるこの両語にも、相容れない性質が看取できる。それは、「季節特定の可・不可」という点である。

「若草」は、おおかたにおいて早春に芽生える草葉を指す。前に挙げてきた数首の例からも察せられるが、以下に今少し、『万葉集』以降、平安前期ごろまでの用例を挙げる。

春日すら田に立ち疲る君は哀しも若草の妻なき君は田に立ち疲る
(万葉・巻七・二二八五 よみ人しらず)

春はまづあづまぢよりぞ若草のことはつげよ武蔵野の風

(古今六帖・「人づて」・二八六四)

かたをかの雪間にきざす若草のはつかに見えし人ぞ恋しき

(好忠・二二)

このように、「若草」が示す季節感は、一貫して春である。それに対し、平安前期の「若紫」の例は、「若草」のような特定の季節との結びつきを感じさせない。「若草」のほか

にも「若菜」「若葉」など、「若」を冠する歌語と強固なつながりを見せる季節は春だが、「若紫」の用例を概観しても、そうした傾向は薄い。

前掲した『伊勢物語』初段の「若紫」については、春の例に数えても、基本的には差し支えないと思われる。初段の内核である一首は、「春日野の若紫のすり衣」と、春をイメージさせる「春日野」の地名で詠み起こされ、また、主として春に行われることの多い鷹狩りを契機とした恋物語であることなどが、有力な判断材料になる。

しかし、春を感じさせるいくつかの要素が盛り込まれている『伊勢物語』初段でさえ、問題がないわけではない。そもそもこの段は、季節をはつきりとは特定していない。^⑨たとえば、後代に絵画化された『伊勢物語』初段を見てゆくと、この段の季節を、梅の花などを描きこむなど、春として描くものと、紅葉を背景に織り込むなど、秋として描くものが確認できる。

「春日野」、「狩」など、基本的に春のイメージを抱かせる『伊勢物語』初段の絵画が、春・秋の間で季節的な揺れを見せるのはなぜか。その理由は、先行研究に論じられるように、直接的には、春日という地に関連して描きこまれた鹿にひかれてのことだろう。また、中世以降の和歌では、たとえば、

三笠山月さしのぼる影さえて鹿鳴きそむる春日野の原

(西行法師家集・二六三)

春日野に鹿ある所

春日山朝日まつまの明ぼのに鹿もかひある秋とつぐなり

(拾遺愚草・一八九九)

など、春日と鹿を同時に詠み込み、平安朝和歌には用例が乏しい「秋の春日」の例が増加する。このような和歌表現の変化も、『伊勢物語』初段絵画化における春・秋の間の季節不定現象と不可分だろう。こうした点についても、すでに先学による指摘がある^⑪。

森 田 直 美

ちなみに、春のイメージが強い春日ではあるが、少数派ながらも秋の春日を詠む例が、早く『万葉集』から確認できる。

春日野に 咲きたる萩は 片枝は いまだ含めり 言な

絶えそね (万葉・巻七・一三六三よみ人しらず)

秋されば 春日の山のもみぢ見る 奈良の都のあるらくを
しも (万葉・巻八・一六〇四大原真人)

春日野の 萩は散りなば 朝東風の 風にたぐひて こ
こに散り来ね (万葉・巻十・二二二五よみ人しらず)

また、平安期和歌にも、春以外の季節をイメージさせる春日

詠は僅少ではあるものの、

春日野の野辺の秋萩霜雪のとしふるごとに色まさりけり

(能宣・一二三)

といった、秋冬の詠がないわけではない。こうした例も勘案すれば、「春日野」という語には、『伊勢物語』初段の絵画を春に寄せ、完全に定着させきるだけの引力が不足しているということ、指摘してもはばからないだろう。

そして同様のことが、より強く「若紫」に言える。すなわち、本来は春とのゆかりが深い「若」を冠した「若紫」は、実際には春という季節をそれほど強く連想させるものではないのだと言える。このことも、『伊勢物語』初段絵画化における季節の揺れに関わっているのではないだろうか。

たとえば、以下に挙げる『後撰集』が所収する二例の「若紫」例は、ともに植物の紫草を詠んだものだが、いずれも雑部に配列され、特定の季節を思わせる語彙、表現もない。

武蔵野は袖ひつばかりわけしかど若紫は訪ねわびにき

(後撰・雑二・一一七七よみ人しらず)

まだきから思ひ濃き色に染めむとや若紫の根を尋ぬらん

(後撰・雑四・一二七七よみ人しらず)

また、『うつほ物語』吹上下巻の作中和歌には、

秋深み野辺の草葉は老いぬれど若紫を今は頼まむ

(吹上下巻・嵯峨院)

と、晩秋に「若紫」を詠む例も確認される。^⑧

さらに色相をいう例も含めて概観すると、「若紫」の季節性は、ますます定めにいくくなる。色相を言う場合の「若紫」の多くは、花の色、とりわけ藤の花を形容する場合が多い。たとえば時代的に早い例として、

武蔵野に色やかよへる藤の花若紫に染めて見ゆらん

(亭子院歌合・二九よみ人しらず)

がある。藤の花は、

春夏の中にかかれる藤波のいかなる岸か花はよすらん

(重之・八三)

といった和歌が端的に示すように、晩春から初夏、すなわち春・夏をまたいで咲く花と捉えられている。また、他の花を形容する例を挙げると、

武蔵野の草のゆかりに藤袴若紫にそめてにはへる

(元真・七〇)

などがあり、この場合、該当する季節は秋になる。

以上のように、色名としてさまざまな花を形容するにあたって、「若紫」はいよいよ特定の季節を呼び起こす歌語ではなくなる。つまり、「若草」や「若菜」が、その一語だけで春を喚起するのに対し、「若紫」は、それ単体では季節を特定することが困難な語なのだとと言えるだろう。

五 平安前期の「若紫」が喚起する心象

ここまで、『万葉集』と平安朝前期和歌を通して、まず、「若紫」の出で来る道筋に、「若草」と「紫」との語義的、および和歌的イメージの融合があるだろうことを述べた。また、「若草」を比較対照として、「若紫」に看取できる季節特定の不可能性についても示してきた。そしてここからは、筆者が本来の目的としていた、「平安前期において、「若紫」という語が喚起する具体像とはどのようなものか」という点の検討に思考を戻したい。

和歌表現とは、必ずしも現実をそのままに写し取ることを目指してはいない、という点はいったん置く。ここまでの用

例を踏まえて、きわめて合理的に考えた場合、特定の季節、すなわち、春と深い結びつきを示さない「若紫」は、早春に芽吹いた紫草の新芽をイメージさせるものではないと考えられる。

本稿の冒頭近くに『歌枕歌ことば大辞典』を引き、「若紫」の語義のひとつは「紫草の若いもの」と捉えられてきたことを示した。しかるに、この解説の「若いもの」という定義が、もし芽吹いたばかりの植物を意味するものならば、少なくとも平安前期和歌の「若紫」にはそぐわない説と言わざるを得ない。では、「若紫」の「若」とは何か。

すでに拙稿において指摘したことだが、紫草という植物は、主に染料となる根（紫根）に注目が集まる植物である。日常生活のみならず、文学表現においても、この点は変わらない。本稿に挙げてきた用例を見返しただけでも、「若紫の根」に注目し、染色を意識して形成された和歌の多さは、十分に感じ取ることができるだろう。

では、「若紫」の「若」とは、「未成熟な根」「発育しきっていない根」を意味するものだろうか。しかし、この想定も、本稿の中で見てきた「若紫のすり衣」（『伊勢物語』初段）、「思ひ濃き色に染めむとや」（後撰・一二七七）といった例を前にすると、やはり「若紫」が喚起するイメージには当たらないように思われる。これもきわめて、染色の現実にくすした

思考だが、未発達で、染料成分が十分に備わっていない紫根を積極的に使用するという感覚が、染色を日常としていた王朝人にあったとは考えにくい。紫根染色では、「ひげ根」と称されるような、細く未発達な根を、まず用いることはない。和歌の中での表現が、実態と必ずしもイコールではないという点を差し引いても、少なくとも、「思ひ濃き色に染めむ」であるとか、通常染色よりもダイレクトに布に染料を搾りつける「すり衣」に、染料成分が不足している「未発達な根」を使うなどとする表現は、王朝人には発想されにくいものではないだろうか。

では、「若紫」とは何か。「紫」との差異はどこにあるのだろうか。「紫」にも、「若紫」と同様に、

「いみじう恨むれば、時々はきこゆる折もあるは」と女の言ふに

言の葉は色やは見ゆるは濃紫ふかき心はねそめてぞしる

（兼盛・二五）

など、紫草の「根」に注目し、「根」と「寝」を掛けて、染めにことよせた恋歌の表現が散見する。また、『伊勢物語』四一段に著名な「紫」の詠、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木もわかれざりける

などは、妻その人、もしくは妻への愛情の強さを暗喩する例に数えられる。こうした例は、恋人関係、夫婦関係にある人を暗喩する「若紫」と、同工の表現と見ることができらるう。さらに、

池のほとりにさける藤のもとに、女どものあそびて
花のかげをみたる

藤の花色ふかけれやかげみれば池の水さえこむらさきなる

(貫之・六二)

紫の色しこければ藤の花松のみどりもうつろひにけり

(躬恒・一七七)

といった、花の形容に用いられることも多く、とりわけ藤との結びつきが強いことも、「若紫」と同様である。

こう見てくると、もはや「紫」と「若紫」とを概観し、歌語として用いられる場合の決定的な表現的差異を見つけたのは、難しいと言わなければならないように思われる。あえてひとつ挙げるならば、「藤浪のかかれるさしの松は老ひて若紫にいかで咲くらん(順・二一五)」や「秋深み野辺の草葉は老いぬれど若紫を今は頼まむ(うつほ物語 吹上下巻 嵯峨院)」の

ように、「老」との対で「若」が持ち出されるといった、対比表現に使用されやすい傾向があるという点ばかりだろう。

『日本国語大辞典』(第二版)の「若紫」の項には、第一義に「淡い紫色。うすむらさき」とあり、つづく第二義に、「植物」「むらさき(紫)」の異名」と記されている。加えて、「若紫」の季節を春と定義している点は、ここまでの考察に基づくと従い難いが、特に、植物としての「若紫」は、単に「紫」の別称なのだとする第二義の解説は、穏当なものだと考えられる。

ただし、この解説に不足点があるとすれば、それは語感差への言及だろう。総合的に用例を見渡してみれば、「紫」と「若紫」の与える印象が、まったくの合同だとするのは、やはり少々無理がある。「若」を添えることで生じる、「若」を冠さない「紫」との差は、その語が有する瑞々しさや清新さ、柔和さや頼りなさ、淡さといった要素が付加されることである。よって「若紫」は、色相の淡さや、人物の若々しさを暗喩するものとなりうる。翻せば、そうした語感差以上の差異は、読みとりにくいとも言える。

冒頭に言及した以前の拙稿では、『伊勢物語』初段や、『うつほ物語』の作中和歌にある「若紫」を、「掘りたての、瑞々しくハリのある生の(乾燥前の)紫根」と読んだ。「若紫」の「若」が、特に「根」に注目の集まる紫草の、瑞々しく柔

和な状態を心象として喚起するならば、この読みはやはり捨てがたいものである。^⑧紫根の主な収穫期は晩秋から初冬であるため、「若紫」の「若」が、早春をイメージさせるものでないとなると、なおさら、「若紫は柔らかな生紫根」という考えに執したくなる。しかしこれは、非常に現実的に、合理的に、染色や染料の実態に引きつけて考えた場合の帰着点で、歌語がしばしば示す抽象性・概念性という観点を排した、そうした面では問題のある結論であることも否めない。

本稿、および関連する拙稿へのこの批判ご批正を待ちつつ、「若紫」という歌語の現実性と、歌語的概念化の時期・過程は、今少し詳細に、他の色彩、染料と和歌表現との比較考察も踏まえて、別稿を期す所存である。

(講師 日本文学)

注

- ① 拙稿「若紫のすり衣」考―主として染料・染色技法の性質から考える『伊勢物語』初段形成への作用―(拙著『平安朝文学における色彩表現の研究』(風間書房二〇一一年)所収)。
- ② 拙稿「平安朝の和歌と染色・染料―『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として―」(小山利彦氏編著『王朝文学を彩る軌跡』(武蔵野書院二〇一四年)所収)。
- ③ 久保田淳、馬場あき子両氏編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店一九九九年)。「若紫」の項の執筆担当は小池一行氏。

- ④ 新編国歌大観CD-ROMでは、初句「とむれども」。しかし、山口博氏「藤原輔相と藤六集」(『王朝花壇の研究』(桜楓社一九六七年)所収)の説、「第一句「とむれども」は「染む」でなければならぬ」に従い、「染むれども」と改めた。

- ⑤ 伊原昭氏「紫への疑い」(『色彩と文学 古典和歌をしらべて』(桜楓社一九五九年)所収。なお同論は、『万葉の色その背景をさぐる』(笠間書院二〇一〇年)に改稿版が再録されている)。拙稿「紫の名高―考―万葉集の「紫」と「名」―」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第一号二〇〇五年三月)。また、西山秀人氏は(『平安和歌の色―紫のバリエーション』(『国文学 解釈と教材の研究』第五十一巻二号二〇〇六年二月)古今集時代の和歌において、紫が概念化された色彩語となる過程に、漢詩文の影響が大きいことを指摘されている)。

- ⑥ 鈴木宏子氏「若紫巻と古今集」(『王朝和歌の想像力 古今集と源氏物語』(笠間書院二〇一二年)所収)。原岡文子氏『源氏物語』に仕掛けられた謎「若紫」からのメッセージ(『角川学芸出版二〇〇八年)にも、同様の指摘がある(なお原岡氏の論考は、『源氏物語とその展開―交感・子ども・源氏絵』(竹林舎二〇一四年)に、改稿版が再録されている)。

- ⑦ この和歌が、巻名に直接的に結びつくとする見解は、早く『花鳥余情』に指摘されて以降、ほぼ定説として扱われてきた。また『源氏物語』の巻名に関する近年の詳論としては、清水婦久子氏「源氏物語の巻名と和歌―物語生成論へ」(和泉書院二〇一四年)がある。

- ⑧ 『古今集』一七番歌「つまもこもれり」の「つま」は、男女のどちらであるか断じがたい。同歌は『伊勢物語』第二段にも所収され、こちらの「つま」は男性を指す。

⑨ 前掲注①の拙稿では、『伊勢物語』初段の季節を初春と見たが、本稿をもつて考えを改めたい。

⑩ 千野香織氏「春日野の名所絵」（『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』（便利堂一九九一年）所収）など。

⑪ 前掲注⑩の千野氏論文に、『伊勢物語』初段の絵画化に関わる、中世以降の「秋の春日詠」の影響などが指摘されている。

⑫ この和歌に詠み込まれる野辺の枯草と若紫は、それぞれ、年齢を重ねた嵯峨院と、年若い息子の涼を暗喩している。

⑬ 前掲注②の拙稿。土佐秀里氏「紫草のにはへる妹」考（『古代研究』第四七号二〇一四年二月）にも、「紫草」は染料となる「根」に表象の中心をもつことが指摘されている。

⑭ 平安期の和歌には、染料や染色に由来する日常的、現実的感覚が、比較的ダイレクトに反映される傾向があることも、すでに、前掲注②の拙稿で指摘した。

参考

・ 吉見武夫氏「『若紫』の色彩表現―和歌、『伊勢物語』初段、『源氏物語』若紫巻への展開」（『中古文学会平成二六年度春季大会（於立教大学新座キャンパス）口頭発表』）。

資料出典

・ 小学館 新編日本古典文学全集『万葉集』『伊勢物語』『源氏物語』。
・ 『万葉集』を除く和歌は、全て新編国歌大観CD-ROMによる
が、読解の便宜上、適宜表記を改めた。